

広島災害調査団報告会「平成 26 年広島土砂災害に学ぶ」

広島災害調査団報告会 実行委員会

広島災害調査団報告会「平成 26 年広島土砂災害に学ぶ—土地の成り立ちを知り、土砂災害から身を守る—」が、一般社団法人日本応用地質学会主催、中国四国支部・災害地質研究部会共催により平成 27 年 2 月 21 日に広島県立総合体育館（広島市）で行われた。これは平成 26 年 8 月 20 日に発生し甚大な被害と社会的影響をもたらした広島土砂災害から半年が経過するのを機に、被災地である広島市にて一般市民を対象とした報告会を行うことで、市民の防災意識を高めることを目指したものである。開催にあたり、国土交通省中国地方整備局、広島県、広島市からの後援、中国地質調査業協会からの協賛が得られた。

本報告会は二部構成で実施された。第一部では、本学会が半年をかけて継続的に行ってきた調査結果を、8 名の報告者が講演する形式で行われた。報告された内容は、専門家の目で見た今回の土砂災害の調査・解析結果のほか、地元における災害文化の伝承記録や災害リスク、宅地開発に関わる法規制など、社会的に注目されるものが含まれた。

続いて第二部では、第一部の報告内容を踏まえた総合討論が行われた。ここでは土砂災害から「身を守る」をテーマとし、会場の聴衆を交えた質疑・討論が進められた。市民からは、自分の住む土地の何が危ないか、それを知るための専門家による出前講座を学会に要望したい、といった意見があった。これらを受け、閉会挨拶で長谷川会長から「土砂災害との付き合い方 10 箇条」が提唱されるとともに、市民への防災教育、地学教育の重要性と、市民に対するアウトリーチ活動の必要性が示された。

また報告会場の一角には展示スペースが設けられ、土砂災害箇所周辺から採集された岩石サンプル・ボーリングコアや、復建調査設計（株）のご協力による 3D 地形モデル、朝日航洋（株）のご協力による航空レーザー測量結果（地形立体表現図）のポスターが展示された。休憩時間には展示スペースに人垣ができ、活発な意見交換が交わされるなど、大変な賑わいとなった。

当日はあいにくの雨であったにも関わらず、当初の定員を超過する 129 名の参加があった。この中には一般市民や高校生が多数含まれ、マスコミ各社からの取材も行われるなど、土砂災害や防災意識に対する市民の関心の高さが感じられた。また参加者を対象としたアンケートを行い、多くの回答が得られた。一般市民を対象としたこのような報告会は当学会では初の試みであったが、盛況のもと、閉会された。

以下に当報告会のプログラムとアンケート結果の概要を示す。

名称：平成 26 年広島土砂災害に学ぶ —土地の

成り立ちを知り、土砂災害から身を守る—

日時：平成 27 年 2 月 21 日（土）13：00～17：

00

場所：広島県立総合体育館大会議室（広島市中
区基町 4-1）

会費：無料

定員：120 名

プログラム：

第一部 講演

司会：井口隆（防災科学技術研究所）

1. 広島災害を受け応用地質学会は何を課題とするのか 千木良雅弘 (京都大学防災研究所)
 2. 雨の降り方と土砂災害の発生との関係について 中井真司 (復建調査設計)
 3. 土石流の実像に迫る - 発生から停止までの挙動を知る - 横山俊治 (高知大学)
 4. 地質の違いから見た土石流の個性と被災状況 曾我部淳 (中電技術コンサルタント)
 5. 災害文化の伝承から学べること - 八木地区に残る伝説から - 小笠原 洋 (復建調査設計)
 6. 広島市の地形の成り立ちと土砂災害のリスク 小林 浩 (朝日航洋)
 7. 広島市の都市開発の歴史と災害リスクの変遷 加藤弘徳 (荒谷建設コンサルタント)
 8. 宅地開発に関わる法規制と運用の問題点 釜井俊孝 (京都大学防災研究所)
- 第二部 総合討論 (司会：井口隆)
閉会挨拶 長谷川修一会長

参加者からのアンケート調査の集計結果

一般住民向けの講演会は学会としても初めての試みであったことから、今後に向けて参加者にアンケートを依頼した。78名からの回答があり、回収率は60%であった。参加者の年齢は50歳代と60歳代がやや多いが、20代から60代までほぼまんべんなく参加されていた (図1)。性別では男性が8割、女性が2割で、職業は会社員が半分、その他公務員、学生、会社役員、無職と続いている (図2)。住まいは県外が5割を超え、広島市内からの参加者は4割であった (図3)。

報告会の開催をどこで知ったかについては、知人紹介が4割で一番多く、ついで学会HPと学会

メールマガジンからそれぞれ2割前後を占めていた (図4)。



図1

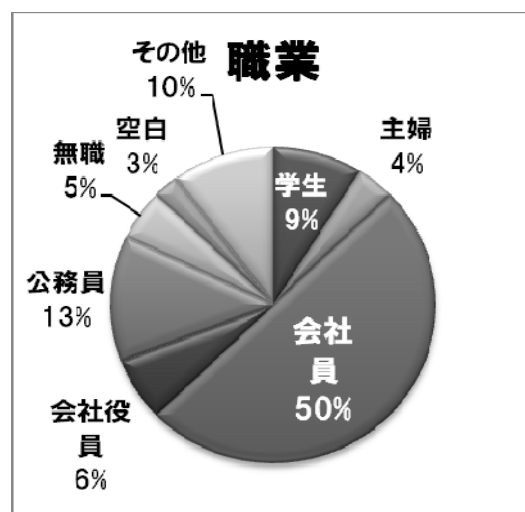


図2

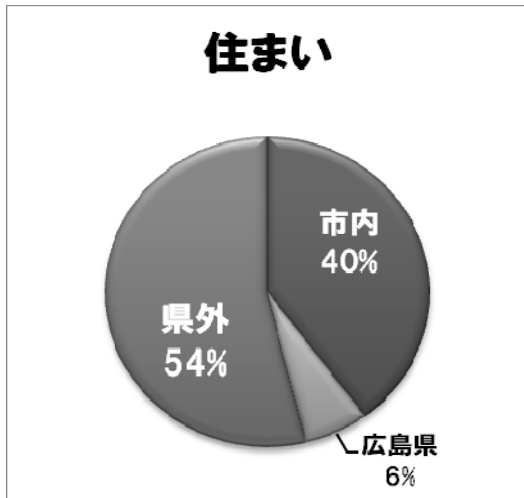


図 3

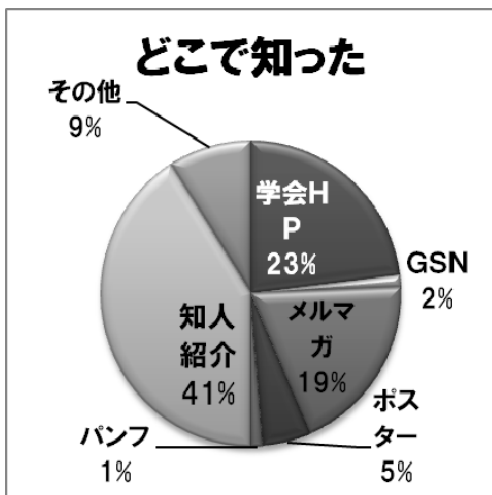


図 4

記述を求めた設問については、2 の「印象に残る内容・キーワード」では、「土石流・山津波」、「蛇抜け」、「沖積錐、扇状地」、「マサとマサ土」、「流木災害」、「崖条例」などの用語が幅広く挙げられていた。3 の「詳しく知りたい内容」に関する質問では、土石流の到達範囲・再来周期・発生機構、先行降雨の定量的評価、広島災害での避難の成功例など様々あり、報告書を是非まとめてほしいとの声もあった。4 の「報告会は役に立ったか」では 9 割以上が役に立ったとの回答で、そ

の理由では「災害や地形・地質に関する知識や情報を得ることができた」や「学ぶきっかけができた」、「インターネットなどいろんなアプローチがあることを学べた」など評価する意見が多かった。中には「具体的にどうするのか（まで話が）至っていない」といった厳しい意見も出された。

5 番目の設問の「どんな地学教育・防災教育があればよいか」の設問には、ほとんどの方が記述されていた。全てをまとめきれないが、地学の必修化を望む声や、記憶力中心の授業でなく、自分の住む地域の土地の成り立ちを知る様な地元に密着して学ぶこと、さらには現地の見学会の開催などフィールドで学ぶ機会を望む声が多いのが印象的だった。中には砂遊びや山を作って雨を降らせて崩してその様子を体験できる実験の要望もあった。最後の応用地質学会に対する要望については、あまり多くの記述はなかったが、今後も同様の報告会（洪水なども）の開催を望む意見や各種の情報発信などを望む声が多かった。